

のび太の恐竜

農学研究科M1 中野 周平

原作：1979年12月から三か月に亘ってコロコロコミックに連載。

映画第一作：1980年3月公開。

映画第二作：2006年3月公開。

概要

映画ドラえものの記念すべき第一作。この作品なしに、映画ドラえもんは語れないと言っても過言ではないだろう！藤子・F・不二雄にとっても、シリーズのなかで最も愛着の深い作品でもあるようだ。この名作は、リニューアルされたアニメドラえもんにおいても一作目の映画となった。原作・旧作・新作、この三作について、比較も行いつつ見所を書いていきたい。

原作

これが基本。F先生特有の、シンプルな線でありながら豊かな表情、コミカルな動き、首長竜ピー助とのび太との温かい交流、5人の冒険と口論と結束が読者を大冒険へと引き込んでいく。1975年に増刊少年サンデーに掲載された『のび太の恐竜』（てんとう虫コミックス10巻・大全集20巻に収録）を加筆修正し、大幅に膨らませた作品。前半部分の両者の違いを比べつつ読んで面白いのでオススメ！

映画第一作目

アニメドラえもんにおいて初めての映画作品である。僕がはじめて観た印象としては、しみりとした作品であるように感じた。作画技術の問題なのかそういう演出なのかは分からないけれど、キャラの表情はあまり変わらず、驚いたり怒ったり泣いたり喜んだり、そういうものがあまり強調されていない。シーン間の起伏があまりなく、淡々とストーリーを追っていく印象。

基本、ストーリーは原作に忠実であるが、一部、カットあるいは変更となっている。「鼻でスパゲッティ」は最初のスネ夫の家のシーンに統合されていたり、白亜紀での食物調達のシーンがカットされていたりする。焚き火を囲み5人で言い争うシー

ンもすっかり違う印象になっており（特にジャイアン）、正直残念であった。また、黒マスクの連中の残虐性は比較的和らげてある。

見所は、シーンを挙げろとなると正直言って僕としてはあまり思いつかないのだけれど、五人の素朴な表情や仕草、行動に癒され、等身大の冒険をしたあとの最後のシーンのなんとなくしみりと涙がこみ上げてくるところだろうか（見所って感じではないですなあ笑）。ストーリーの分かりやすさも魅力的ではある。ストーリーを全く知らないなら、原作もしくはこの映画をまず観るのがいいだろう。

映画第二作目

2005年にリニューアルしたアニメドラえもんの映画第一作目である。監督はドラクラッシャーとの異名を持つ渡辺歩氏だが、セリフや名シーンなど内容に関しては多くの場面で驚くほど原作に忠実に作られていた。一方で心揺さぶられる激しい感情表現と現代アニメーションの迫力など、いままでのドラ映画にはなかった魅力が満載。感情の起伏が強調されており、卵からピー助が生まれたり、黒マスクに尋問されたり、白亜紀にピー助を送り届けると決意したり、といったシーンでののび太の感情が非常によく伝わってくる。今までのドラえもんを作画・演出もろともぶっ壊して、まったく新しいアニメとして生まれ変わらせることに成功したといえよう。作画監督の小西賢一氏による手書き感を強調させたのその荒い線画——翌年以降もドラ映画はこの作画方針を引き継いでいくことになる——は、原作とは対極に位置するけれど、逆に、これによって原作のような豊かな表情や動きが表現出来ていると思う。ただし、それが空回りしている場面もそれなりにあるということも記しておく（笑）。

アニメドラえもんのリニューアルにおいて、原作に近づけるため、ドラえもんの保護者的な部分を極力減らしのび太と対等な友達の関係にしたのだが、それに合わせてか、劇中におけるドラえもんの保護者的なセリフはほぼカットされている。（あるいは、ストーリーの流れが止まるような場面はすべてカットしたのかも）。一億年という年月の長さについて語り合うシーンが無かったのは少し残念だった。また、タイムマシンの空間移動機能・時間移動機能の説明が不十分だったり、エラ・チューブや深海クリームが何の説明もなく使用されたりと、原作・旧作を知っていることを前提にしたような面も垣間見え、初見では分かりづらいかもかもしれない。

いくつかの変更点も新たに加えられた。恐竜の実態は一部、最新の学説を取り入れ

たものとなった。例えばティラノサウルスの歩き方の変更や、プテラノドンからクエツアルコアトルス（スネ夫が舌噛まないで言えるのがすごい）への変更（前者は峡谷には生息していなかったという説から）など。一番大きな変更点は最後のシーンである。五人はタイムパトロールの助けを借りず、自分たちの手で日本まで帰る。「遠いのに歩いていけるはずがない」という意見もあるが、最後まで自力でピー助を故郷まで送り届ける少年たちの表情を見ると、そんなことはどうでもいいと感じてしまう！ハンターとの戦いが一区切りついた後から、日本まで歩いている場面のあの独特の壮大な雰囲気は音楽と相まって新鮮な魅力がある。

僕の一番好きなシーンは、タイムマシンが故障して、五人の知恵を振り絞ってタケコプターを使うことにして、明け方、タケコプターで飛翔するシーンである。「モーター始動！」というドラえもん的一声ののち、主題歌のBGMが流れます。ドラえもん史上、もっともカッコよくタケコプターを描いたと言える。まさかタケコプターで涙するとは思わなかった（笑）。

最後に、「渡辺監督らしいな」と個人的に感じた変更点を紹介しよう。ピー助を育てるシーンで、原作ではドラえもんがひみつ道具の「成長促進剤」を与える。ところが、新作ではその描写がない。のび太が自身の力でピー助を育てあげたことになる。これが、後々の両者の関係をより深いものに行っているように思う。ここで思い出すのは1999年に同時上映作品として公開された、同氏が監督をつとめた「のび太の結婚前夜」である。渡辺監督は作中の静香とパパとの会話のシーンで、原作に存在する、ドラえもんによる「正直電波」の使用シーンを描かなかった。道具によって静香に本音を言わせるという描写を避けたのだ。このような「心の通い合いへのひみつ道具の干渉」を避ける演出は、渡辺監督らしさの一つであると僕は思う。

新旧の比較

いままで、原作と旧作、原作と新作の比較をおこなってきた。ここで、旧作と新作との比較を少ししてみたい。

旧作にあって原作にはない表現を新作で踏襲している例がいくつかある。そのうちの一つを紹介しよう。のび太が恐竜の卵を発掘して家に持ち帰るシーン。原作では手で持ち運んでいるが、旧作ではシャツの中に入れていた。新作でもこのアイデアが採用された。新作では同時に玄関でママと立ち話をする近所の妊婦さんを描くことによ

って、「卵 in シャツ」が、のび太がピー助の親であるというメッセージとしての表現にもなっているように思われる。

続いては布団について。冒頭の日常シーン、のび太の服の色は、旧作では黄色で新作では水色だ。そしてなんと、布団の色も同じく、旧作では黄色、新作では水色なのである。監督が、旧作で服と布団の色が同じであることに気づいて新作でも同じように色指定したのか、はたまた単なる偶然か。細かい部分ではあるが、妙に気になってしまった（笑）

まとめ

映画ドラえもん第一作として、当時の子供達を夢中にさせた「のび太の恐竜」。その世代が親になった時代に蘇った「のび太の恐竜 2006」。「のび太の恐竜 2006」オリジナルの、パパがむかし恐竜に熱中していたと語る印象的なシーンがある。これはちょうど、親世代が同じ「のび太の恐竜」という作品にむかし熱中していたことを表現しているのかもしれない、という説をどこかで聞いたことがある。名作は世代を超えて引き継がれるのだ。

ここ2年は「奇跡の島」「ひみつ道具博物館」とオリジナル作品続きだけれど、またリメイクしてほしいなあ。F先生の漫画を、劇場で観たいのだ！